

文芸

俳句

糠床の白ひもれだす薄暑かな
池田 逸子

帰りくる子らを待らぬる豆の飯
伊藤 敬子

曇り空実も葉も一色実梅かな
伊藤 定男

クールビズ最初の一步ためらひし
今関満喜子

箱の中夏いっぱいの宅急便
魚地 照子

父と子の音色それぞれ草の笛
江森 悦子

今朝咲きて夕べに切らるゝ花あやめ
大谷 武彦

洗い鯉もう一杯とそつと注ぎ
川島 孝夫

姉、妹話鮭ぎつつ実梅挽ぐ
川島 通則

放射線消えよ列島聖五月
向後 寛

青梅や幼く逝きし友思ふ
越川せつ子

クールビズ営業マンの胸毛かな
越川 福子

薫風に洗濯物の坂上り
小松 藤男

牛の目に涙の滴薄暑来る
佐瀬 輝夫

青梅のうぶ毛光りし雨上り
鈴木とし子

漆飛び越え子等の梅雨晴間
鈴木 利子

更衣て女らのこえ眩きて
玉虫 栗扇

青梅の山盛りこぼる一升ます
土屋美枝子

鶏鳴のもう響かずに明易し
土屋 義昭

仁王門殿めしく建ら棕櫚の花
戸村 静草

青梅や籠いっぱいのお裾分け
西崎さち子

空豆や空を仰いで時を待つ
早川 勇

短歌

健やかにある平凡を幸となし
一日ひと日を積ねて生くる
高梨 キヨ

津波にて瓦礫の中より探し出す
涙ながらに家族の遺品
土屋 好

友人とお話しするを樂しみな
残り少なき余生となりぬ
鈴木 益郎

まだ慣れぬ新妻料理に老妻は
口出しせぬが仕事手にする
越川 義則

人は皆どこへゆくのか病院は
集まりて去る駅に似通ふ
八角 三枝

「青木家は眺めがいい」と縁談に
乗り気でありし二父と思へり
青木 秀子

大祖母と呼ばれて気付く
重ねたる年の重さよ九十六歳
吉岡 信子

九十九里の潮騒ききつ
とき夫と波に遊びし若き日思ふ
田崎 尚美

つば広き麦藁帽子売られぬて
野良の仕事にひとつ買ひ来ぬ
押尾 輝子

街道の曲がれる角に飾られし
武人の植輪けふも手を挙ぐ
西山満里子

新しき車に変わって暫くは
細き裏道さけて走りぬ
片山 初子

休み無くテニスの部活に励みたる
男の孫今日け果の大会
鈴木まさ子

川の辺の流れに浴びて自転車
ベダル踏みつつ春の野を行く
平山 芳子

決算の残業を終へ帰る道
満月天空に高く照りぬつ
島田ますみ

共にせし五十五年をまた思ひ
遺影の夫を仰ぎぬにけり
斉藤つね子

こうほう博物館 40

伊藤順一画

「鳥と少女」

この絵は本町出身の今は亡き画家、伊藤順一の作品のひとつである。赤いヘアバンドをした少女がしゃがみ、何か物思いにふけていている。手にはインコがとまっている。全体としては少女をモチーフとしながら、少し暗い絵ではある。この作品の記録はないが、他の作品と比べると一九八〇年代前半の作と思われる。伊藤順一はこのような少女と小鳥をモチーフとした作品を、何点も残している。一九九〇年代になると、同じモチーフの作品は明るくなり、少女もより可愛らしく、より理想の姿を追及しているようである。

伊藤順一は一九五六年、北清水で伊藤一路・美佐子の長男として生まれる。県立成東高校から武蔵野美術大学へ進み、油画の勉強をし、大学卒業後制作活動を開始する。一九九三年には浅井忠賞大賞を受賞したほか、数々の賞を受け、評価も高まった。作品には先の少女をモデルとしたほか、いなかの家族像を描いた「里の風土記」とした百号を超える大作、子供群像とキツネを合わせた「へんなどたち」や静物など多岐にわたる。また、絵本も二冊描いている。

彼の父もまた北清水で開業医の傍ら、多くの絵を残している。父は主に文楽を題材にした絵を描き、その独特な世界を創っている。順一もそうした父の姿を見て育ち、画家を志したのである。しかし、伊藤順一は一九九八年、これから円熟するといふとき、この世を去った。あまりにも若すぎる死であった。七月二三日から図書館町民ギャラリーで、伊藤順一絵本原画展を開催します。



▶伊藤順一画 「鳥と少女」